

## 54 新出資料『櫻園先生叢話』について

——高岡佐渡家文書から

正橋 剛 二

最近開示された高岡佐渡家資料中に頭記標題の写本一冊、従来未知のものがあつた。細部についてはまだ不明の事も多いが、取りあえずその外観、内容等を報告し、さらに写本の成立に関し若干の考察を加えたい。

## 一、新出資料の概要

①外題 『櫻園先生叢話』（表紙左に墨書）

②内題 『櫻園小石先生叢卷一』

③原本 柳川 戸上重較去 斐（てい） 筆記

門人

津山 高橋 煥 由 佑 校

④蔵書印 佐渡家蔵（四字朱文角印二四ミリ角）

⑤装幀・用紙等

表紙 美濃紙二ツ折（一八×二五センチ）

本文 同寸の自家製黒刷縦一〇行野紙、板心上部に魚

尾、下部に「葆光齋蔵」と刻、一行二四字詰に使用、墨付四三丁、紙撚り仮綴じ。若干の虫損あり。

なお、原本（戸上本）および写本（新出佐渡家本）の成立年代・場所を示す記述等は表面上には全く認められない。

## 二、新出資料の内容

叢話本文の各々は一話毎に欄外に朱丸を付し、以下に記述され、長ささまざまの叢話総数一四一話が四三丁にわたり連綿と続く。

各話の内容からみて①語句・用語の説明、②薬剤使用の留意事項、洋薬の解説、③過去の症例との比較、④漢方と蘭方との対比、⑤傷寒論の解釈、金匱要略の批判、⑥医範提綱、内科撰要からの引用、⑦その他医療とは直接関係ない教訓等、多岐にわたる。これらの配列から一定方針のもとに編集されたとは認めがたく、ほとんどが脈絡なくアトラランダムな配列で、一部には重複した記述も認められる。

とは言え、各話は甚だ具体的な記述で、おそらく臨床医としての小石元瑞をその至近距離で見聞した内容の逐

一的記録と思われる。それ故当時の蘭方家の日常診療を  
 追真的に伝えるものがある。

今一つ注目すべきは、本書には頭註の形で一九個所の  
 ほか本文傍註など、朱筆の書き入れが多数認められ、こ  
 れらは特に書冊の二四丁以下の後半部に集中するよう  
 で、「朱筆／以下係紹／生批」とあり、以下には「紹按  
 二：」とか「紹云：」と加筆するもの一〇箇所もある。  
 このほか「可刪」とするものも数箇所で見られる。紹と  
 は言うまでもなく元瑞の後継小石中蔵のことである。

内題で巻一とするが巻二以下は見当たらない。

三、戸上本・佐渡家本の成立をめぐる

新出佐渡家本を筆写したのは誰か。一見して、版心の  
 印字、発見時の保存状況、佐渡三良と究理堂の関係等か  
 ら、葆光齋と号した佐渡三良（二八二〇～七九）が在塾  
 中（一八三八～四〇）に兄弟子戸上重較（一八〇七～八  
 〇）から借受けて複写したと見られるのだが、重較の経  
 歴を調べてみると問題はそれ程簡単でないと判る。

重較も高橋煥も裡園先生門籍には記名がない。別の資  
 料では重較入門は弘化二（一八四五）年で、三良帰国後

五年目のことになる。従って三良は在塾中この写本を作  
 ることはありえず、かつ面識もなかった。高岡にいる三  
 良がどうして重較との接触を得たか。またもし第三者仲  
 介による接触とすれば、いつ誰の介在によるものか。重  
 較の在塾以後、究理堂塾生には代々書き写して後輩に伝  
 えることが行われたかも知れない。三良の身内から第二  
 人、従第一人が入門したからこの内の誰かが作った写本  
 を献呈した可能性も残される。

さらに、頭註・添削をなぜ中蔵が手を入れたのか。筆  
 記録完成後、目を通して貰うとしたらそれは当然元瑞の  
 筈であろう。にも拘らず、中蔵が手を入れるのは、どう  
 しても元瑞に頼めない事情（例えば元瑞の長逝など）が  
 あったのではないだろうか。とすればこれは嘉永二年以  
 後の事となる。

戸上本の校閲者高橋煥については全く知る所がない。  
 しかし、彼も同じくこの写本を持ったであろうし、彼以  
 外の流布本の可能性もあり、今後これらの出現が待たれ  
 る所である。

（富山市）